

# 中国の伝統工芸と現地校における美術教育の実態調査を通じた 図工美術の教材研究と授業の実践

前広州日本人学校 教諭

茨城県日立市立河原子中学校 教諭 浅井 香

キーワード：中国、広州、教育課程、美術教育、教材研究

## 1. はじめに

現行の図工美術の指導要領では、日本の美術のよさを考えたり見つけたりする内容が多く扱われている。日本人として、それはとても大切なことである。そして日本人学校では、日本のよさはもちろん、学校の所在地のよさを理解し、両国の架け橋となる国際人を育成することも大切な使命である。そこで、図画工作・美術の学習に中国を身近に感じられるような内容を取り入れることで、中国の文化に興味をもち、日中両国のよさを感じ取りながら成長できる生徒を育成できると考え、このテーマを設定した。

## 2. 中国の伝統工芸について

広州日本人学校の所在地である中国・広州市は広東省の中心都市であり、中国三大都市のひとつである。街中にはたくさんの美術館や博物館などがある。もともと中国の工芸品に興味があったので純粋に見てみたいという気持ちと、何か教材に取り入れられるものはないかという思いをもって休日を使って見学に行った。そこで多くの伝統工芸品を見て感じたことは、中国では伝統的に細かい柄で空間を埋める傾向が強いということである。その中で特に目を引いたのは、「剪紙（せんし）」という赤い紙を細かく美しい模様で切り抜いた切り紙である。注意して見ると、広州の街の中にも剪紙をモチーフにした看板などがたくさんあることに気が付いた。美容整形外科医院の看板には美しい女性が、工事現場を囲う壁には広州の風景が剪紙で描かれていた。どのようなものでも剪紙で描くと、中国風の美しいものとしての表現になり、とても面白いと思った。もともと剪紙は春節（旧正月）の飾りに使われ、おめでたいものであり、とても親しみをもたれているものである。大きな公園で行われていた地域の小中学生の美術作品展にも、剪紙をモチーフとした作品がたくさん展示されていた。華やかで美しく、中国を代表する工芸品であり、中国を象徴するアイコンとして地元の方々にも親しまれている。「剪紙」をぜひ教材に取り入れてみたいと思った。

## 3. 現地校の美術の教育課程について

中国の小中学校の美術の教育課程を調べたところ、中国では小学校1年から「美術」であり、専科授業で学んでいることが分かった。内容的には日本と同じように絵画・工芸（工作）の両方を学習している。学習目標としては、技術の習得に重きが置かれているようだった。当時担任していた学級に、広州市の公立小学校を卒業した生徒がいたので、小学校の美術の授業の様子を聞いてみた。その生徒の話によると、絵画などの平面作品を制作することが多く、1つの作品にあまり長い時間をかけないとのことだった。また、決められた時間で絵を描き上げる実技試験があったということだった。水墨画や剪紙を学ぶ機会もあったそうである。広州市近郊の仏山市で剪紙が盛んなこともあり、広州では小中学校の美術の授業で剪紙を取り入れることが多い。そのため、剪紙がより身近なものになっているようだ。広州日本人学校の図工美術の学習で取り入れるのにふさわしい中国の工芸品だと思った。

## 4. 授業の実践

### (1) 小学6年生におけるランプシェードの制作

#### ① 題材について

剪紙を取り入れる題材として、小学校6年の「光の形」を考えた。厚手の画用紙に切り紙を施し、筒状にしてランプシェードを制作する題材を設定した。剪紙には多くの「縁起がいい」とされるモチーフがある。代表的なものとしては桃、ざくろ、魚、蓮の花などがある。また、縁起のいい漢字を用いることも多い。それらの伝統的なモチーフを使うこと、自分の家でお正月や家族の誰かの誕生日などのおめでたいときに使えるものにする、という条件を付けることにした。この題材は広州日本人学校に赴任した1年目から3年間継続して取り組んだ題材である。1年目に指導した児童たちの取り組みと完成した作品がとてもよかったので、2年目、3年目もほぼ同じ内容で授業を行った。

#### ② 制作の様子

まずは児童達が「剪紙」を理解できるように、代表的な図柄をプリントで紹介し、なぜそれがおめでたいとされるのか、ということの説明をした。そのとき、中国語が堪能な児童（両親のどちらかが中国語ネイティブ）が、中国語を交えて補足説明をしてくれたりした。

次に切り絵の仕組みを理解できるようにすることと、カッターの使い方の練習を兼ねて小さな図柄を切り取ってみた。ここで児童たちは「すごい、切り絵って本当に全部つながってるんだ」「ここここをくっつけて全部がつながるようにするんだね」と、剪紙のおもしろさを肌で感じる事ができた。

児童達は自分の意図に合わせ、プリントの図柄をそのまま転写して使うか、自己流に描き変えてもどちらでも良いことにした。気に入った図柄をそのまま使う子、いくつかの図柄を組み合わせて再構成する子、魚や蓮の花などを自己流で描く子など、それぞれの表現意図に合わせて構成を工夫していた。

構成した図柄を画用紙に重ねて切り抜き、円柱状にして作品は完成である。好みで裏からカラーセロファンを貼っても良いことにした。細かい図柄の児童は切るだけで5～6時間かかったが、集中が途切れることなく、最後まで丁寧に制作することができた。

#### ③ 制作を終えて

「私は魚を中心にしたい」「蓮の花がいい」など、児童達は自分の考えをしっかりとって制作に取り組むことができていた。始めに図柄の意味やいわれなどを説明した成果で、児童達が図柄の意味を理解できていたのだと思う。



完成した作品  
(小学6年)

### (2) 中学3年生「私は社長！」におけるロゴマークとパッケージのデザイン、切り紙を貼ったランプシェードの制作

#### ① 題材について

中学3年生は1年間を通して共通のテーマで3つの作品を制作した。

まずは「広州に来る日本人をターゲットにお土産を売る会社の社長」になりきり、会社名とロゴマークを考えた。「広州」をテーマにマッピングで発想を広げ、一人ひとりが「広州のイメージ」を明確にした。そこから「初めて広州に来る人に1番アピールしたいもの」を考え、ロゴマークのモチーフにした。次にパッケージを制作し、最後にお店を装飾するランプシェードを制作した。どちらも最初に考えたロゴマークを元にデザインを考えた。パッケージはお土産の主力商品を入れるためのもの、ランプシェードはレジのところに置くためのもの、という設定である。ランプシェードは市販の紙製のランタンに切り紙を貼って制作した。この切り紙を、中国の剪紙風のデザインにすることにした。この題材は赴任2年目から2年間継続して取り入れた。指導

し始めた年はロゴマークに時間をかけすぎてしまい、ランプシェードが簡単なものになってしまう生徒が多かった。その反省を生かし、次の年はロゴマークは形をまとめる程度にとどめ、パッケージの制作とランプシェードに多くの時間を掛けられるようにした。日本人学校の中学3年生は3学期になると受験のために帰国してしまう生徒が多い。そのため、初年度はランプシェードが「最後のおまけの作品」ようになってしまっていた。翌年はランプシェードに多くの時間をかけられるようにしたことで、「最後のまとめの作品」として生徒たちも力を入れて制作できるようになった。

## ② 制作の様子

生徒たちは初めは「広州って特に何もないよな…」と言っていたが、マッピングやアイデアスケッチなどを繰り返したことで、「広州タワー」「五羊像」など、自分の広州でのお気に入りのスポットを見つけていった。また、「暑い」「新しいものと古いものがごちゃっと混在している」といった、感覚的な特徴にも気づいていった。

右の写真は広州に6年間在住していた生徒の作品である。広州の風景をかわいらしく描いたキーホルダーやストラップを売るお店、という設定である。

ロゴマークには簡略化された広州タワーと**猎德**（りえだ）大橋（広州の中心を流れる「珠江」という川にかかる大きな橋。夜になると華やかにライトアップされる）、大きな太陽が描かれていた。太陽は「暑い」ということを表現しているそうである。これらのものがこの生徒の中での広州の象徴なのだろう。ロゴマークは明るい色合いで描かれており、広州のよさをアピールしたいという思いが伝わってきた。ランプシェードの切り紙は、ロゴマークに新たに花の絵や線を加え、中国風の切り紙らしくアレンジされたものである。ランプシェードの制作を始める際には、中学3年生にも小学6年生と同じように剪纸の伝統的な図柄を紹介し、図柄がもつ意味も説明した。そのため、他の生徒達も植物のモチーフを足して華やかにしたり、線を加えて2つのモチーフをつなげたりと、中国風の剪纸の特徴を良く理解した作品を制作することができた。



完成した作品  
（中学3年）

## ③ 制作を終えて

学級全員の作品が完成してから、鑑賞活動として作品のプレゼンテーションを行った。全員が広州のどんなところをアピールしたいのか、しっかり伝えることができていた。また、ロゴマークを剪纸風のデザインにアレンジする際のこだわりなども説明できていた。一人ひとりが広州への思いを形にするとともに、中国の文化への理解を深めることができたと思う。

## 5 成果と課題

### (1) 成果

「せっかく中国にいるのだから、縁あって数年間生活したこの国に親しみがもてたら」という思いで、学習指導要領の範囲内で各学年の様々な題材に少しずつ中国風のものを取り入れてみた。中国に長く住んでいたり、両親のどちらかが中国出身だったりする生徒は中国に親しみをもっていることが多いが、数年間中国に住んでいる児童生徒であっても、あまり親しみをもっていないように見受けられることも少なくないように感じられたからである。私自身は、広州日本人学校に派遣される前から中国の文化や歴史に興味があり、何度か旅行で足を運んでいた。色々思うところもあるかもしれないが、悪いことばかりではない、いや、それどころか長い歴史の中で育まれた文化には日本のものとは全く違うおもしろさがある。生徒達よりも遅く中国に住み始めた私が言うのはおこがましいが、そのような思いで中国風のものを取り入れた題材を指導し始めた。

中国風の切り紙は現地校との交流会などで経験したことがある児童生徒も多く、小学6年、中学3年、両方の学年で抵抗なく受け入れられていた。

「光の形」では、1年目は形を真似させて、途中でちぎれないように切らせるだけで精一杯だったが、続けていくうちに私も模様の意味を理解でき、児童生徒に適切な指導をすることができるようになった。私がインターネットなどで調べたことを説明すると、中国に長く住んでいる子が補足説明をしてくれることもあった。その説明が、次の年度の指導に大いに役に立った。参考作品をつくったりすることで、私も中国風の切り紙の美しさ、奥深さに改めて気づき、その美しさ、良さを子ども達に伝えたいという思いを強くすることができた。小学校卒業と同時に中国を離れる児童が多く、引っ越す際に図工の作品を処分してしまう家庭も多いと聞いていたが、この作品は「平面に戻してスーツケースに入れて日本に持って帰る」と言っていた児童が多かった。それだけ愛着があり、中国での思い出になるような作品がくれたのだと思う。広州に派遣される前から切り絵や江戸切り紙が好きで、授業にも取り入れていたので、これからはそこに中国風の切り紙も加えていきたいと思う。

「私は社長！」では、中学校卒業と同時に中国を離れる生徒が多い中学3年生が、中国生活の集大成になるような作品を仕上げることができた。中学3年の生徒の中には長いと10年以上、広州で生活してきた子もいた。中学3年に進級した時点では、ほとんどの生徒が2年以上の生活経験があった。生活していたからこそわかる広州の特徴や特別なものを作品に取り入れたことで、生徒一人ひとりの思いのこもった作品をつくることができたと思う。美術の作品という形に表すことで、普段は意識していない自分の居住地の良いところや特徴に気づき、その気づきが作品をさらに良いものにするという相乗効果が表れることもわかった。これらのことは広州に限らず、どこの土地で実施しても効果的であると思われる。

## (2) 課題

これからの課題は、これらの経験を日本でどのように生かしていくかである。今回の研究で、地元の特徴的なものを取り入れることで生徒達の作品への愛着が増すことがわかった。私の勤務する日立市には桜やサクラダコ、神峰動物園など、デザインに取り入れられそうなアイコンが幾つかある。これらのものを生徒が興味をもてるような形で取り入れ、地元への愛着と作品への愛着を同時に育める題材を考えていきたいと思う。しかし、日立には授業に取り入れられるような伝統工芸はあまりないので、日立の特徴的なアイコンと中国の伝統工芸を組み合わせるなどの工夫をしていきたい。中国から帰国して感じたのは、やはり日本人の中国に対するイメージは決してよいものではない、ということである。私は中国で3年間、地元の方にたくさん助けられながら楽しく生活してきたので、中国に対して強い愛着をもっている。美術の授業で中国の工芸を体験することが、中国に興味をもつきっかけになってほしいと思う。興味をもつことは相手を理解することの第一歩である。小さなことではあるが、美術の授業から民間レベルの国際理解を進めていきたいと思う。